

機関番号：37201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年度～2010 年度

課題番号：20530652

研究課題名（和文） コラージュ技法の発達的特徴と臨床的特徴

研究課題名（英文） Developmental and clinical characteristics of collage techniques

研究代表者

西村 喜文（NISHIMURA YOSHIFUMI）

西九州大学・健康福祉学部・教授

研究者番号：40341549

研究成果の概要（和文）：本研究は、健常な乳幼児から高齢者を対象に、コラージュ技法を用いて発達の集計調査を行った。具体的方法としては、2189 名のコラージュ結果を収集し、形式分析（全体的表現特徴、切り方、貼り方などの表現特徴）、内容分析（表現された具体的内容）、印象評定分析（表現された作品の印象）を行い、乳幼児から高齢者までのコラージュ表現の発達的特徴を明らかにした。また、コラージュ技法のアセスメントとしての有効性について考察した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we conducted a developmental data collection survey on subjects ranging from young children to older adults using collage techniques. Specifically, we collected collage results from 2189 subjects [Consider providing more detail about the subjects. It is clear from the text that the subjects ranged from young children to older adults, but a break down of the age groups might be informative.] and conducted analysis on form (characteristics of overall expression, cutting methods, pasting methods, and other characteristics of expression), content (specific content that was expressed), and impression evaluation (impression of the expressed piece) in order to clarify the developmental characteristics of collage expression by persons ranging from young children to older adults. We also give a discussion on the effectiveness of collage techniques as a form of assessment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

## 1. 研究開始当初の背景

森谷(1987)は、箱庭療法の延長として「コラージュ(collage)」を治療法として開発した。その後、コラージュ療法は、簡便性や利便性などから幅広い領域で実践され心理療法技法のひとつとして定着してきた。コラージュ療法の研究は、事例研究を中心に発展してきたが、ここ数年基礎的研究も多くみられるようになってきた。コラージュ技法の基礎的研究としては、杉浦(1994)、滝口等(1999)の研究があるが、被験者の人数が少なく性別にも偏りがあり条件が統制されていない。このように、近年、基礎的研究においても報告が見られるようになってきたが、その数は十分ではない。コラージュ療法を科学性の高い技法にするためにも、客観的な枠組みの中での研究は不可欠である。

## 2. 研究の目的

本研究は、2189名のコラージュ結果を収集し、乳児から高齢者までのコラージュ表現の発達の特徴を明らかにすることである。また、コラージュ表現の全体的印象の変化を発達の視点より分析し、コラージュ技法のアセスメントとしての有効性について考察することである。

## 3. 研究の方法

### (1)調査対象

対象は、乳幼児から高齢者までの2189名とした(内訳：乳幼児375名、学童370名、中学生279名、高校生403名、大学生53名、成人485名、高齢者224名、男性1023名、女性1166名)。実施に当たっては、乳幼児、学童、中学生、高校生、高齢者の所属する公立保育所、学校、社会福祉協議会へ研究目的などを説明する文章を提示し研究への協力を依頼し了解を得た。

### (2)調査機関

2008年4月から2010年12月

#### ① 材料

[雑誌]各年代に共通する同じ雑誌2冊(共通素材)と各年代の特徴を捉えることをねらって各年代男女の代表的な雑誌を2冊(選択素材)を準備した。

[台紙] 白色の八つ切りの画用紙(380mm×270mm)。画用紙の設定に関しては、制作時間、保存性、利便性を考慮し決定した。

[用具] スティックのり、はさみ、鉛筆、用具はいずれも人数分準備した。

②乳幼児：ボックス・コラージュ法。700枚の切り抜きをボックスに自然、動物、人間等に分け準備した。1～3歳児は保育士に補助として参加してもらい、4歳以上は3～4名の集団でおこなった。

③学童から高齢者：材料、台紙、用具を各人に1セットずつ準備し、コラージュについての説明と教示をした後、自由制作を促した。

### (3)分析方法

佐藤(1998,1999)森谷(1999)今村(2006)の先行研究にもとづいて形式分析、内容分析、第三者による印象評定を行った。

#### ① 形式分析

全体的表現の特徴

切片数(切抜きの数)余白の量 はみ出し重ね貼りなどから分析した。

#### ② 内容分析

人間(女性、男性、子ども等)、②動物、③その他(自然風景、室内、建物、食べ物等)がどのように貼られているかを分析した。

#### ③ 印象評定分析

今村(2006)の作成したコラージュ印象評定尺度(CISS)と森谷(1999)による判断軸を参考に項目を作成し分析を行った。

④ 臨床場面におけるコラージュの有効性  
被虐待児のコラージュの特徴について分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 乳幼児

#### ①形式・内容分析

1歳児：他群よりも余白やはみ出しが多く一箇所にも何枚も貼り付ける作品が多い

2歳児：1歳児と同様にはみ出し、重ね貼りが他群よりも有意に多い。注目すべきは、文字への関心の高まりからか、文字使用がもっとも有意に多かった。また、女兒は性役割に関心を示すように女性像を有意に選ぶことが分かった(2歳児>4.5.6歳児 p<.05)。

**3 歳児**：3 歳児ではテーマ性のある作品がみられるようになり、それは年齢とともに増加した。2 歳児に引き続き、性役割がより顕著になり、70%もの女児が女性像を貼るようになり、これは各年齢群でもっとも多くなった。また、3 歳児では色彩数において他群よりも有意に多かった(3 歳児>1.6 歳児 p<.05)。切片数において性差が見られた(男児<女児 p<.01)。

**4 歳児**：この時期に男児は、男性像を多く貼るようになった。男児にも性役割が理解されだしたことがうかがえるように、女児に色彩に関心を示した(男児<女児 p<.05)。

**5 歳児**：余白の分量、はみ出しは 5 歳児以降減少した。このことは、全体を把握し使用することができる知覚能力の発達との関連もあると捉えられる。

**6 歳児**：はみ出し、重ね貼りなしの作品が年齢とともに増加し各年齢群の中で最も多かった。テーマ性のある作品は、年齢とともに増加し 71.2%に見られた。5 歳児以降の作品にははみ出しや重ね貼りが減少し、統合性、テーマ性のある作品が多くみられた。

## ② CISS から見たコラージュ表現の特徴

安定性、表出性の高い作品を作るのは 4.5 歳児であるが、6 歳児では低下した。安定性は 4 歳児と 5 歳児、表出性は 3 歳児と 5 歳児の女児に高い印象がみられ、創造性に関しては、4 歳児、5 歳児の男児に高い印象が得られた。

## ③ 判断軸から見たコラージュ表現の特徴

4 歳児以降「まとまった」「美しい」「未来的」「遠景的」「意味のある」作品を作る傾向がみられた。女児の方が「まとまった」「美しい」作品を作る。4 歳児、5 歳児の男児に動物的表現が多くみられた。

### (2) 児童期

#### ①形式分析

切片数は、学年との主効果がみられ(p<.01)、1.2 年生と 5 年生に有意な差がみられた(1.2 年<5 年 p<.05)。男子が文字を使用する割合が高く、小学 4 年生では顕著にみられた(p<.05)。この時期の自己主張の芽生えと関係があると思われる。

#### ②内容分析

女子が自然風景を貼る割合が高く(p<.05)、

とくに小学 1 年、小学 5 年の女子にその傾向がみられた(p<.05)。食べ物の切り抜きは女子が高く(p<.05)、とくに、小学 3 年、小学 5 年、小学 6 年生にその傾向がみられた(p<.05)。男子に乗り物を貼る割合が高く(p<.01)、とくに 1 年(p<.01)、2 年(p<.01)、3 年(p<.01)、6 年生(p<.05)に差がみられた。

#### ③コラージュ印象評定 (CISS)

5 年生以降、安定性、表出性、創造性の高い印象の作品がみられ、特に女子に顕著にみられた(p<.01)。

#### ④判断軸から見たコラージュ表現の特徴

5 年生以降「まとまった」「美しい」「外向的な」な作品がみられた(p<.05)。低学年で非現実的作品、4 年生以降に「自己イメージ的」作品がみられた。印象面においては 3 年生、4 年生から発達の変化が表れる事が示唆された。女子は「まとまりのある美しい作品」という統合性を感じさせ、男子は広がりや強さを感じさせる作品が多かった。以上のことより、判断軸を用いても性役割(gender role)の獲得についてははっきりとした差がみられ、アセスメントとして有効であると思われる。

### (3) 思春期・青年期

#### ①形式分析

中学 3 年生のはみ出しの割合が高く、高校 3 年生のはみ出しの割合が低い。文字の使用は、高校 1 年生と高校 2 年生の男子に文字を貼る割合が高い。文字を用いて外的世界への働きかけを行っているともいえる。すげかえは、男子にみられ、中学生(21.9%)と高校生(21.3%)でのすげかえ表現がみられ、大学生ではみられない。余白量は、中学 2 年生が一番多く、学年があがるにつれ減少する傾向がみられる。

#### ②内容分析

自然風景は、中学生の出現率約 50%で高校生は約 40%、大学生では約 70%と高校生で出現率の減少がみられた。人間全体の出現は中学生男子が出現率は高い。女子が児童期、思春期女子の人間像を貼る割合が高く、成人期、老年期の人間像は男子が高い。

#### ③コラージュ印象評定 (CISS)

中学 2 年生に「安定性」「表出性」「創造性」の低さがみられた。自我発達上の危機状態と関連し、不安定性や自己開示の抵抗、創造す

るエネルギーの低下がコラージュ作品から伺える。性差では「安定性」「表出性」は女子に高く( $p<.01$ )、創造性においては、中学2年生、中学3年生、大学生では男子の方が( $p<.01$ )、高校2年生では、女子の方が「創造性」の印象が高い( $p<.01$ )。

#### ④判断軸から見たコラージュ表現の特徴

中学生のコラージュ表現には、今生きている空間の外見や外面を表現している「外的世界」の印象のものが多かった。高校生のコラージュ表現には、自分の内面の葛藤を「近景」に写るような大きな切抜きのものや文字での表現で、メッセージ性の強い作品で表現していた。大学生の作品も高校生と同様に内面を表現しているが、「遠景」の作品へと変化し、落ち着きを取り戻し、「秩序」のある「まとまった」「美しい」作品へと変化し、自分を振り返る内省化を行っているものと捉えられる。

#### (4) 成人期

##### ①形式分析

**20代:** 切片数は24.6枚で他の年代より多く特に女性が有意に多かった。余白量も28.3%で各年代より多く、色彩数も多く使用していた。切り方も、四角や円形、手ちぎりなどバリエーションが多くみられた。

**30代:** 文字の使用が多くメッセージ性の強い作品が多くみられた。

**40代:** 余白量は21.2%と各年代で一番少なかった。切り方は四角が多く、はみ出し、裏貼りが多くみられた。大きな切り抜きで多彩な意味深い創造性が高い表現が多かった。

**50代:** 切片数は、平均12.9枚と各年代で一番少なく余白量は21.5%であった。切り方は多角形が多かった。

##### ②内容分析

**20代:** 動物、食べ物、マークの使用が多く植物や宗教性の切り抜きは少なかった。

**30代:** 人間の切り抜きが多く、特に女子においては人間の「児童期」を貼る傾向がみられた。

**40代:** 植物の使用が多くみられ、人間の切り抜きは女子において思春期を多く貼る傾向がみられた。

**50代:** 宗教的な切り抜きが多くみられた。人間の切り抜きは、乳幼児、青年期、老年期

の使用が多かった。

以上のことより、①20代の作品特徴として、創造性や活動性が高い作品が多く内的表現力の高さが伺えた。特に女性においては自分のテーマを見出しやすいと思われた。②30代においては、20代と同様生産性や活動性のある作品が多くみられた。特に女性においては、四角形以外に切り方のバリエーションの方差がみられ、豊かな表現力がみられた。③40代においては、大きな切り抜きを使用し組み合わせながらの表現力がみられた。40代で複数の年代の人間を使用し自分を振り返りながら家族を表現しているとも思われた。④50代の作品は、宗教的な切り抜きがみられ、また、四角形以外の切り方も多く感受性豊かな表現が多くみられた。身体面の衰えや老後というテーマを投影している作品も多くみられた。

#### (5) 高齢期

##### ①形式分析

**60代:** 台紙の向きは約76%の作品が縦向きに使用し、特に女性に多くみられた。切片数は6枚で他の年齢群より多かった。余白量は17%でありバランスの取れた作品が多かった。

**70代:** 台紙の向きは60%の作品が縦向きに使用し、切片数は5.5枚であった。余白量は20%であり、色彩が多く中心性のある作品が多かった。

**80代以上:** 台紙の向きは約77%の作品が縦向きに使用し特に女性に多くみられた。切片数は4.5枚で余白量は29%であり、他の年齢群に比べ多かった。色彩の暗い作品がみられた。

##### ②内容分析

**60代:** 自然(風景)、物体、植物、食べ物、人間の順に多く貼られ、テーマ性のある作品が他の年齢群より多かった。

**70代:** 自然(風景)、植物、人間、食べ物、物体の順に多く貼り、有意な差はみられなかったが、60代、80代に比べ未来を多く想起したり宗教性のある作品も多くみられた。

**80代以上:** 自然(風景)、人間、食べ物、植物の順に多く貼られ宗教性のある作品が他の年齢群より多くみられた。

以上のことより、60代の作品の特徴として、

他の年齢群より台紙を縦向きに使用し、切片数も多く余白量が少ないことから、自分の内面を奥深く表現しようとする傾向がみられた。70代の作品の特徴として、60代より切片数が少なく、余白量が多くなっていることから、活動性や創造性の低下を思わせる作品が多くみられた。80代以上の作品の特徴として、加齢に伴う運動機能の衰退から活動性の低下が作品にもみられた。物体のない作品が多く、外的関心の薄らぎがとらえられる。

#### (6)臨床場面におけるコラージュの有効性

児童予後施設入所児 78名(小学生 36名(男子 21名、女子 15名) 中学生 39名(男子 19名、女子 20名))を対象にコラージュを実施し、コラージュ表現の特徴について①年齢別、②入所年齢別、③在園年数別、④虐待別、⑤コラージュ体験回数別に分析した。

##### ①年齢別特徴

###### 小学生

形式的特徴として、中学生より余白量が多かった。内容的特徴として、自然風景、人間、酒・タバコの切片は少なく、アニメ・キャラクターの使用が多かった。印象面からみると、安定性が低い印象の作品を作る傾向がみられた。表出性、創造性の年代別、性差ともに有意差は見られなかった。

###### 中学生

形式的特徴として、切片数、すげかえで性差が見られ、切片数では女子が、すげかえでは男子が多かった。内容的特徴として、人間を多く貼り、乗り物は男子に多くみられた。アニメ・キャラクターは女子が多く使用した。印象面からみると、全体的に安定性の高い作品を作り、表出性の高い印象の作品を女子が、創造性の高い印象の作品を男子が作る傾向がみられた。

##### ②入所年齢別特徴

###### 乳幼児期入所

形式的特徴として、切片数は女子が多く、すげかえは男子が多かった。内容的特徴として、乗り物を男子が多く使用した。印象面からみると、表出性の高い印象の作品を女子が、創造性の高い印象の作品を男子が作る傾向がみられた。

###### 学童期入所

形式的特徴として、すげかえは男子が多かっ

た。内容的特徴として、乗り物を男子が多く使用した。印象面からみると、安定性の高い印象の作品を女子が作る傾向がみられた。

##### 中学生入所

形式的特徴はみられなかった。内容的特徴として、食べ物を多く使用する傾向が伺えた。印象面の特徴はみられなかった。

##### ③在園年数別特徴

###### 1年未満在園

形式的特徴として、すげかえを男子が多く表現した。内容的特徴として、乗り物を多く使用した。印象面の特徴はみられなかった。

###### 2～5年在園

形式的特徴として、文字の使用が多かった。内容的特徴はみられなかった。印象面からみると、安定性の高い作品を女子が、創造性の高い作品を男子が作る傾向が見られた。

###### 6～9年在園

形式的特徴はみられなかった。内容的特徴として、乗り物を男子が多く使用した。印象面の特徴はみられなかった。

###### 10年以上在園

形式的特徴として、切片数は女子が多かった。すげかえは男子が多かった。内容的特徴として、乗り物、自然風景、酒・タバコの使用が多かった。印象面からみると、創造性の高い作品を男子が作る傾向がみられた。

※切片数は、1年未満が最も多く、6～9年在園している児童は13枚と少なくなり、10年以上になると増加していく。

##### ④虐待種類別(直接的虐待、間接的虐待)

直接的虐待：身体虐待、心理的虐待等

間接的虐待：養育困難(両親病死、入院など)

###### 直接的虐待群

形式的特徴として、切片数は女子が多く、すげかえは男子が多かった。内容的特徴として、女子が人間を多く使用し、乗り物は男子が多く使用した。印象面からみると、安定性の高い作品を女子が作る傾向がみられ、創造性の高い作品を男子が作る傾向がみられた。

###### 間接的虐待群

形式的特徴として、すげかえは男子が多かった。内容的特徴として、人間の使用が多かった。印象面の特徴はみられなかった。

##### ⑤コラージュ回数別特徴

###### 1回制作

形式的特徴はみられなかった。内容的特徴はみられなかった。印象面の特徴はみられなかった。

#### 2～5 回制作

形式的特徴として、すげかえは男子が多かった。内容的特徴はみられなかった。印象面からみると、創造性の高い作品を男子が作る傾向がみられた。

#### 6～9 回制作

形式的特徴はみられなかった。内容的特徴として、自然風景を多く使用した。印象面の特徴はみられなかった。

#### 10 回以上制作

形式的特徴として、切片数は女子が多く使用した。重ね貼り、すげかえが少なくなる傾向が伺えると思われる。内容的特徴として、乗り物、酒・タバコを男子が多く使用した。印象面からみると、表出性の高い作品を女子が作り、創造性の高い作品を男子が作る傾向がみられた。また、コラージュ体験が多くなるほど、表出性が高くなり、創造性も高くなる傾向がみられた。

#### 本研究の位置付け及び今後の展望

これまでのコラージュに関する集計調査は行われてきたが(滝口 1995, 山根 1995, 岩岡 1998)、これらの初期研究は切り抜き材料や台紙の大きさも十分考慮されていなかった。本研究の場合、以下の点に工夫を行った。

(1) 材料や手続きを十分に統制して数量的な比較を行った。切り抜き材料も全年齢共通の雑誌 2 冊、及び発達段階を考慮して選択した雑誌 2 冊を用いた。

(2) 台紙サイズは、制作時間、保存性などを考慮し B4 判を基本とした。

(3) 児童期 (小学 1 年～小学 6 年) 370 名、思春期・青年期 (中学生、高校生、大学生) 735 名、成人期 (20 代～50 代) 485 名、高齢者 (60 代～80 代) 224 名のデータを独自に集めた。

(4) これまでデータがなかった乳幼児 (1 歳～6 歳) 374 名のデータを集めた。そして筆者が工夫した方法で 1 歳児でも可能であることを証明した。

(5) 結果分析も、従来の数量的分析法のみではなく、今村 (2006) の印象評定尺度 (CISS) と森谷 (1998) の判断軸の提案を参考に、印象評定判断軸からも分析した。

(6) それ故に、乳幼児期から高齢期までの年齢発達の経過を一人の研究者が一貫してより正確にとらえることができたと考える。

しかし、成人期と高齢期は、印象評定尺度と印象評定判断軸に関して、時間の関係上分析することができず今後の課題となってしまった。また、臨床的效果に関しては、不登校児、障害児・者に関して数量的に収集することが難しく、今後コミュニケーションを深めながらの収集が必要であると思われる。児童養護施設入所児に関しては、数量的には十分とは言えず、次年度よりさらなる努力のもと、研究を行っていきたいと思う。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

・乳幼児のコラージュ表現の特徴—印象評定を用いた集計調査—箱庭療法学研究 Vol.24 .No 1 p.35-49. 2011

[学会発表] (計 3 件)

・西村 喜文 「コラージュ療法の基礎的研究」日本コラージュ療法学会第 2 回大会ワークショップ 平成 22 年 8 月 28 日 金城学院大学

・西村 喜文 立川 小雪「印象評定を用いた乳幼児期のコラージュ表現の特徴」日本箱庭療法学会第 22 回大会 平成 20 年 10 月 26 日 愛知教育大学

・西村 喜文 出口久美子 「老年期におけるコラージュの特徴」日本心理臨床学会第 27 回大会 平成 20 年 9 月 5 日 つくば国際会議場

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

西村 喜文 (NISHIMURA YOSHIFUMI)

研究者番号 : 40341549

##### (2) 連携研究者

森谷 寛之 (MORITANI HIROYUKI)

京都文京大学・人間学部・教授

研究者番号 : 60131257

今村 友木子 (IMAMURA YUKIKO)

金城学院大学・人間生活学研究科・

准教授

研究者番号 : 80342111